
もう一つの人格

亜遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの人格

【Nコード】

N0407P

【作者名】

亜遊

【あらすじ】

生まれた瞬間、魔王を倒す勇者だと決められたシオン。魔王を倒して世界を平和にするために、剣も魔法も頑張って修行して、強くなった。

だがシオンには、もう一人の人格があつて。

ファンタジーです。思いつきなので、ぐだぐだになると思います

……。

残酷な描写ありに設定してますが、全然残酷にならない可能性大です。

魔法は、テイルズシリーズからお借りしようと思います。

テイルズシリーズの魔法を知らない方でも、簡単な説明を文章中に入れますので、たぶん大丈夫だとは思いますが……。

たまに、自分で作った魔法も出てくるかも知れません。

プロローグ

クリオラ大陸北端にある村、ミリク。

周りを雪で囲まれているその村は、人々が協力し合い、誰にも知られずに幸せに暮らしていた。

というのは、十六年も前の昔のこと。

十六年前、突然現れた黒い影　魔王によって、今も世界は崩壊へと向かっている。魔王が作り出した魔物に人々は殺され、町や村は滅ばされ、ミリクもいつ狙われるかわからない。

そんな状況の中、ミリクの村人たちはびくびくとおびえて毎日を過ごしていた。

たった一人を除いては。

魔王が現れた日に生まれたシオンは、魔王を倒す勇者として今まで生きてきた。

剣も、魔法も、なにかもが秀でたシオンは、今日も修行をしよう、村の広場へと向かう。

それが、いけなかった。

『なにこんなところで剣振ってたんだよ……』

「な……！？」

『殺そうぜえ？ オレは早く殺してえんだよ……！』

………

気が付くと、辺りは真っ赤に染まっていた。

剣で切断された腕。魔法で焼かれたであろう顔。シオンの周りにある肉片と、おびただしい量の返り血。

散らばる肉片の中には、きっと家族や友人のものもあったであろうにも関わらず

シオンは笑っていた。

怒りでも悲しみでもなく、声を上げて楽しそうに、嬉しそうに笑っていた。

「これがお前の本質なんだよ、シオン！ お前は人を殺すために強くなってたんだ……！」

『ああ……。そうみたいだな……』

「お前の感情が昂ったとき、オレは出やすくなるんだからよ……。これからはもつと感情的になってくれよ？ シオン……」

ドサツと、シオンはその場に崩れ落ちた。

「はぁ……」

溜め息を吐きながら体を起こす。久しぶりに昔の夢を見てしまい、最悪だと僅かに苦笑をもらした。

「はよ、シオン。遅いお目覚めだな？」

小さく欠伸あくびをしたのと同時に、扉が開いて一人の男が姿を現す。

「うるさい……」

「お？ なんだよ、ご機嫌斜めか？」

わしゃわしゃと俺の髪を乱暴に撫でる男はレイン。半年前ぐらいに、村で倒れていた俺を連れて帰り、今まで面倒を見てくれている親兼パートナーみたいなもの。

親にしては二十一歳と若すぎるな……、と軽く真剣に考えながらも、レインの手から立ち上がって逃げる。

「そんな嫌そうな顔すんなよな。……シアン出てきたらどうすんだよ」

シアンは、もう一人のオレの名前。俺がややこしいからつけてやった。

レインは全て知っていて、シアンに気に入られてる……と思う。シアンと互角だった初めての奴だし。

「別に……、構わない」

「この家が潰れていいなら変われよ……って、こんなことしてる場合じゃねえ。仕事だ」

「また……？」

仕事。簡単に言えば依頼みたいなもの。

《盗賊を倒して》とか《魔物を退治して》って感じの討伐系から、《ものを探して》とか《持ってきて》って感じの日常系の依頼まで種類はさまざま。

ちなみに俺たちは討伐系しかない。理由はいろいろあるけど、楽だから。依頼こなさないと食ってけない俺たちにとって、報酬高くて楽な討伐系はお気に入り。

ほらよ、と言ってレインから手渡された依頼の内容が書かれてある紙に目を通す。

「……頭に角が生えてて、足が四本の黒い魔物を退治して下さい……か」

基本、魔物に名前はつけられない。同じ見た目の魔物がごく少ないからだ。

突然変異で色が変わったり、他の魔物を取り込んだりして見た目が変わると聞いたことがある。それでも魔物は生まれた場所からあまり離れないらしく、特徴と目撃した場所さえわかっているれば探すのは簡単。

どうやって討伐依頼の報酬がもらえるのか。それは、昔レインが少しだけ教えてくれた。

依頼を受注する場所　酒場には、魔物を感知する職業の人がいるらしく、依頼のあった魔物が倒されたかどうかわかるらしい。何故倒した人物までわかるのか聞いてみたけど、レインも知らないと言っていた。

『どうせまた弱い奴じゃねえのかあ？』

「さあ……」

脳に直接響くようなシアンの声。この声は俺だけにしか聞こえない。だから、レインとシアンが話す場合は俺が通訳になる場合が多い。……非常に面倒くさいが、シアンに変わるといろいろと大変だから我慢している。

「準備終わったか？」

服を着替え終わると、いつの間にかいなかったレインがスーッとパンを二人分持って戻ってきた。

「ほら、パン食ってさっさと行くぞ」

「むぐ……っ」

パンを無理矢理口の中に押し込まされる。

「っ……なんでそんなに急ぐんだよ……」

「夜までに戻ってきたいんだよ」

どことなく真剣な口調のレインに、俺は不思議に思いながらも着いていった。

俺たちが住んでいるのは、ミリクから南にあるユルクズという町の、端の方にある小さい家。人があまり近寄らない場所にあり、俺にとっては好都合。

近くに武器屋、防具屋、道具屋、酒場があり、「便利だろ?」とレインが自慢していた。

でも、俺の存在を知っているのはごく僅かの人だけ。よく通う武器屋のおっさんと、道具屋のおばさん。あと酒場の店主に、魔物を感知する職業の少女。

レインに家から出るなって言われて約半年。よく半年でこれだけの人数にしかばれなかったな、と少し感心する。

俺たちは昼になる前に、家の裏にある小さな裏門から町の外へ出た。

「そつえば……、場所どこ……?」

「はあ? お前読んでなかったのかよ」

頷くと、レインは溜息を吐いたあと俺に説明してくれる。

「町を西に行ったところにある、なんか変な名前の森だ」

「森……?」

以前、レインがいない間家で地図を見ていたが、西に森なんてなかったはずだ。

「地図……、載ってなかった」

「そつか……、ならもしかして……」

一人でぶつぶつと言いながら歩き続けるレイン。「地形が……」

とか「魔物は……」とか聞こえてくるが、俺にはまったくわからない。

訊きこうとレインの肩を叩こうとして手を伸ばしたが、すぐに下ろす。いつだったか、考えごとをしているレインに話しかけて物凄く怒られたことがあったからだ。

しばらく俺は無言で歩いていると、何か音が訊こえてきた。

グル……ウ……ッ

ガウアル……アアッ

「……………」

俺はその場に立ち止まり、無言で腰に差してあった剣を抜いて両手に構える。剣を抜いたときの金属音で、ようやくレインも今の状況に気が付いたみたいだ。

「おいおい……。いつの間に囲まれたんだよ……」

苦笑いを浮かべながらレインも剣を抜いた。

レインの剣は一般的な片手剣。片手剣と言っても、サイズは大剣近くあり、レイン専用の力に特化した特注品だ。

それに比べて、俺は片手剣より細くて軽い双剣。一般的な双剣より細く軽く出来ていて、速さに特化した俺の特注品。

どっちも切れ味は抜群だ。

俺たちを囲んでいるのは、狼を原型にしたような魔物。だが、それはあくまでも原型だけ。

色なんかは勿論違うしなかには形が変形しているものもいて、背中から足が生えていたり、骨が目から突き出している。

十体前後いるこの魔物たちから、正常な体の奴を見つけるとい
方が難しそうだ。

睨むように見て、魔物の動きを見る。……が、魔物は一体たりと
も動こうとはしない。

「レイン……、こつちが動くの待ってる……」

「ああ、そうみたいだな。……どうする？ 俺が先制してやろうか
？」

ニヤリと笑みを見せるレインの顔。確実に、この状況を楽しんで
る。

「いや……、俺がいく」

そう言ったと同時に、地面を蹴って目の前の魔物へと向かって走
る。魔物もそれに気付き、鋭く尖った爪で俺に攻撃しようと右の前
脚を上げ、振り下ろす。

「……っ遅い」

グウウウツツ……

当たる前に俺は身を少しかがめ、右腕を振り上げる。すると、上
から魔物の苦しげな声が聞こえた。

そのまま左右の様子を窺いながら後ろに下がって顔を上げると、
俺の立っていた場所に血だまりができていて、俺に当てるために振
り下ろしていたであろう前脚が血だまりの少し横の地面に刺さって
いた。

『脚を斬り落としただけか。……あの一撃で倒せないようじゃ、オ
レに追いつくにはまだまだだなあ』

ククツと楽しそうに笑うシアンの声にうるさいと言返す。

『ま、頑張れよお』

「シオン、後ろ！」

小さく舌打ちをしたと同時に聞こえてきたレインの声に、急いで

後ろを振り返った。

後ろには、今にも飛び掛かってきそうな勢いで走ってくる二体の魔物。

「くそっ……」

眉を僅かに寄せた後、双剣をぐっと強く握り、魔物に向かって走り出す。

「おいっ、シオン!？」

俺の行動に、少し離れたところで二体を相手にしているレインの動揺したような声が聞こえたが、無視して魔物に突っ込む。

グアアアアアッ!!

魔物との距離が2メートルを切った辺りで、魔物二体が大きく口を開けたのと、俺が強く地を蹴って高く宙に跳んだのはほぼ同じだった。

宙で身体を捻り、魔物の右横に着地する。

グチュッ……という、おそらく魔物二体がぶつかったであろう音が聞こえた後、俺は左腕を思い切り横に振る。

ガ……ア……ッ

肉や骨を斬る感触に、鼻につくような血の臭い。

横を見ると、俺の振った剣が魔物の身体の半分くらいまでとどいて、ぱっくりと水平に切れていた。

剣を引き抜くと二体の魔物がその場に崩れ落ちる。それを見下ろしながら、俺は剣についた血を振り払った。

「ふう……」

息を整えて周りを見渡すと、レインが片付けたのか立っている魔

物は一体も残っていなかった。

「よっ、おつかれさん」

「ん……、レインも……」

双剣を鞘になおしながら言うと、レインがふと思い出したかのよう
に笑い出した。

「そつえばさ、あれすごかったな」

「あれ……?」

「魔物をぎりぎりまで引きつけて横に跳ぶって、普通やらねえだろ」

ああ、さっきの事が……。

いろいろと試してみたい事があったから　　と言おうとしたけど、
何が面白かったのか未だに笑っているレインを見てムカついたから、
レインの脛を思いつき蹴ってやった。

「　　つつ!!」

蹲うずくまって脛を押さえ、僅かに涙目になっているレインを鼻で笑って
から森に向かって歩き始める。

後ろから「待てよ!」とか「おい、シオン!」とか聞こえてきた
けど、あいつが謝るまで絶対に止まってやらないし、話してもや
らない。

.....

自分でもおかしいと思うほどの変な意地を張った俺にレインが謝
ってきたのは、レインが俺に追いついてからすぐの事だった。

「暗いな……、この森……」

森の中に入り周りを見渡す。木々が重なっていて日が入ってこないせいか、もうじき昼になるというのに夜のように薄暗い。

「……嫌だ」

「何がだ？」

ポツリと呟いた俺に、レインは不思議そうな顔をする。

「雰囲気が、と言いかけて止める。レインのことだから、きっとかわれるに違いない。」

「からかったらからかったで蹴るなどのことはするのだが、さすがに、今から魔物と戦おうというときに無駄な体力は使いたくない。」

「おい、何か言えよ」

黙ってそんなことを考えていると、少し不機嫌になったレインからの急かすような言葉。

「うるさい。今お前を蹴ろうか悩んでいるところなんだ、静かにしてる。……とはさすがに本人には言えない為、レインの機嫌がこれ以上悪くならないうちになんでもないとだけ言い、目的地魔物が出たという森の奥へと向かって歩き出した。」

『どうしたんだ？』

「ん……、なんでもない。……少し、変な感じがしただけ」

『代わってやるうか？』

歩いている途中にシアンから聞かれる。草を掻き分けながら返すと、意地悪く言われた。

「……バカ。お前に代わると、疲れる……」

『ひでえなあ。せつかくオレが親切に言ってるのになあ』

「……どこが親切だ」

お前に親切な部分があるなら見てみたい。
シアンと話すのさえ面倒になり、口には出さずに黙って歩く。すると、返事を返さない俺に飽きたのかシアンは俺に話しかけてこなくなった。

ふと、数歩後ろを歩くレインを横目で見れば、レインはまた何か考えることをしていた。

………

しばらく歩くと、少し先に光が射しているのが見える。どうやら、あの場所には木がないみたいだ。

レインは気付いていないみたいだから、俺はその場所を確かめようとレインより少し早く歩いて目の前の草を掻き分ける。

「……っ！」

木々の間に身を滑り込ませて一歩足を踏み出すと、俺は眩しさに目を細め、その思った以上の眩しさに思わず足元がふらついた。

少し森に入っただけで足がふらつくなんて……。

もし丸一日この森の中にいたら、当分目は開けられないだろう。

その間に魔物に襲われたら……。

嫌な想像を振り払うかのように、俺は頭を軽く左右に振った。

「どうした、シオ　！？」

俺の後ろから顔を出したレインもその光に驚いているみたいだ。

少ししてようやく目が光に慣れると、その場から周りを見渡す。そこは、何の変哲もないただの草原だった。

直径何メートルあるだろうか。芝生がひいてあるようなそこは、

何も無さ過ぎて逆に不気味だ。

そこだけばかりと木々が無い。上から見たらこの草原が円を描くような形になっているだろうことは、安易に想像が出来た。

しかも、この草原には花すらも無い。

ここに着く間だけでも、結構な種類の花を見つけたというのに。

いや、それよりも…………。

「何で草が全部同じな長さなんだ？…………誰かが切ったとか？」

レインが眉間に皺を寄せて草をじっと見つめる。

俺はその場に屈み、草がなるべく水平から見えるように視線を下げた。

「やつぱり…………」

思わず出た声に、レインが訝しげに俺を見る。俺は屈んだままレインを見上げて口を開いた。

「…………レインが言った通り、この草原のほとんどの草が高さ15センチぐらいで切られてる。この切り口…………、多分、鎌みたいなものだと思う。」

…………これは俺の推測だけど、俺たちの追ってる魔物、…………こいつ

俺はもう一度目線を草に向け、この草を切った刃物　いや、魔物を想像しながら小さく笑みを浮かべた。

「でも、角が生えてる黒い魔物だろ？ そんな奴見かけなかったぜ？」

「……………」

俺が見逃すはずねえだろ、というシアンの声聞きながら頷く。確かに、いくら周りが暗いからといって、魔物を見逃すほど俺たちは弱くない。シアンが気付かないなんてこともほとんどないはず。それに、物音をたてずに移動するなんてことは不可能に近い。

「違う魔物なんじゃねえの？」

レインの言葉を聞きながら、魔物をもう一度思い浮かべる。

もし、俺がその魔物なら……。

「身体能力をいかにせる場所が近くにあつて、周りを見渡せて……」
呟いて考えをまとめていると、突然、レインが声を上げた。

「おい、シオン。あれ……、人じゃねえか？」

どこか焦ったような声に顔を上げて、レインの視線の先を目で追う。

すると、少し離れた草原の端に、木にもたれかかっている人を見つけた。

遠くからではよく見えないが、どうやら空を見ているようだ。

魔物が出てこないか気をつけながら近づく。

ようやく顔が確認できる位置に来たとき、今まで空を見ていた人物がふと俺たちの方に目を向けて 目が合った。

「……………あ」

「何でお前が……………」

「こら、シオン。女の子に向かってお前は失礼だろ」

動きを止めながら、三人が別々の反応をする。

そこには俺たちがよく世話になる、魔物を感知する職業の少女
リースがいた。

「リース、何でこんなところにいるんだ？」

「何でって……、魔物が消えたから」

「……どういうこと？」

あっさりと言うリースに、意味がわからなくて思わず眉を寄せる。
「あなたが受けた依頼の魔物が消えたのよ。……誰かに倒され
たわけでもないのに」

消えた？ そんなことあるのか？

信じられなくてリースに問い詰めても、リースもよくわからない
としか言わなかった。

いつもなら依頼の一つぐらい達成できなくても 魔物が見つか
らなくても、なんとも思わない。でも、この森が急にできたことと
魔物が消えたことに関係があるなら……。

「……リースが知らないならもういい。……レイン、帰るぞ」

これ以上ここにいっても仕方が無い。そう思っでリースに背を向け
た そのとき。

「っ！ 待って、シオン！」

リースに腕を掴まれた。

「何だ……？」

「出た……、出たの！」

「は？ 悪い、リース。もう少しわかりやすく言ってくれないと、
俺もシオンもわからないんだが……」

困惑した顔で言うレインに、俺もうんうんと頷く。

「だから、あなたたちの追ってる魔物の反応があったの！」

「……場所がわかったのか？」

「う、うん。でも……」

何故かリースは言葉を濁す。何か言いにくいことがあるのだろうか。

「どうしたんだ？」

レインがリースの顔を覗きながら聞く。それでも言わないリースに、早くしてほしい俺としては僅かな怒り……のような感情がこみ上げる。

「そ、その場所が、あの……」

言いかけては止める。そしてレインが問いかける。

そんなやりとりをして、どんどん時間が過ぎていく。

『おいおい、そんなにイライラしていいのかよ？ オレが吐かせてやろうか？』

いつまでたつても言わないリース。シアンが俺に言ったと同時に、感覚ががらりと変わった。

視覚が、変わる。

……はつきり見えているはずなのに、どこかぼんやりとしているような、曖昧な視界に。

聴覚が、変わる。

……すべての音が、シアンと話しているときのように直接頭の中に響くような感じに。

それ以外 嗅覚、味覚、触覚が、一瞬にして消えた。

- シアン視点 -

視界、聴覚がクリアになり、嗅覚、味覚、触覚が一瞬にして戻ってきた。

……いや、戻ってきたはおかしいか。

視覚と触覚が馴染むと同時に、オレは腰に差してある双剣の一本を右手で抜き、すばやくリースの首にあてる。

「っ!!」

「シオン!？」

『お、おい……!!』

シオンとレインの焦ったような声が重なり、リースの息を呑んだ音が聞こえてきた。

「もったいぶつてないで早く教え　っ!？」

剣はそのままでも目的だけ伝えようとすると、突然頭上の木から小せえナイフがオレ目掛けてとんできた。

「チッ……、誰だあ？」

「それはこっちのセリフ。うちの妹に手を出さないでくれるかな？」
そんな声とともに木から下りてきたのは、青髪が特徴的な男だった。

青……いや、青というよりは藍に近い感じだな。

『誰……？』

シオンが、多分無意識のうちに呟く。

「ああ？ シオン、お前知らねえのかよ」

『知らない。……あんまり人と関わらないし』

誰のせいだと思ってんだよ、とぶつぶつ文句を言うシオン。

「誰って……、オレとお前だろ？」

少し意地悪く言ってやると、少し怒ったみたいだ。そんな雰囲気
が伝わってくる。

「誰と話しているんだい？ それとも、独り言？」

「あー……、まあ、独り言みたいなもんだ」

クスツと笑う相手に言葉を返しながらもう一本の剣を腰から抜く
すると、相手の纏う空気みたいなものが変わった。

「……戦う気満々だね」

「それはお前だろ」

ろ、と同時に足で地面を蹴り、相手に振り上げていた右手の剣を
振り下ろした。

風を切る音の後に、キンツという金属と金属がぶつかる音が響く。

「……なんで止めんだよ」

オレの剣を受け止めたのは藍色の髪の男ではなく、レインの剣だ
った。

思い切り眉根を寄せてレインを睨みつけると、レインは苦笑して剣を下ろす。

「そんなに睨むなよ……。っていうかお前、いつの間にか変わってたんだよ」

「お前には関係ねえだろ」

止められてムカついていたら、つい言い方がそっけなくなつた。すると、レインが急に真面目な顔をしてオレの肩を掴んだ。

「関係ないだろ。……いつ変わった？ シオンは、大丈夫なのか？」

その言葉に、「あ……」と声を漏らす。

オレとシオンが入れ替わるには、多くの体力を消費する。それも、シオンだけが。

オレが表に出る時間が長ければ長いほど、比例してシオンの体力も削られる。

それが、この半年でわかったことの一つだった。

少し心配になり、シオンに呼びかける。

「おい……。シオン、大丈夫か？」

「ん……。っ、シ、アン……。もう……」

途切れ途切れに頭に響く声。結構ヤバイ状態みたいだ。

「レイン……。後は、頼む」

それだけレインに伝えた後、オレはシオンに主導権を渡した。

- シオン視点 -

曖昧な視界がはつきりする。五感が元に戻る。

安堵したとともに、足に力が入らなくてその場に崩れ落ちた。

「シオン！ 大丈夫か！？」

「はあ……っ、レイ、ン……？」

そのまま倒れそうな体をレインが支える。荒い息を整えながら、地面に落としていた目線を上に上げると、心配そうに顔を歪めているレインと目が合った。

気分は……、全力疾走した後みたいな感じ。ちょっとふらふらするから、それプラス貧血気味かも。

少し変わるだけでこのくらい体力を使う。……わかりにくいかもしれないけど。

レインに大丈夫と言ってから軽く周りを見ると、突然のことについてこれてない人が二人。

……まあ、それもそうか。シアンのことを知っているのはレインだけだし、ましてやこの男とは初対面だ。

「えーっと、とりあえず……。……大丈夫？」

「シオン……！」

駆け寄ってくるリースと、複雑な表情を浮かべている自称リースの兄さん。

さっきまでシアンに剣向けられていたの忘れてるのか？ よく近づいてこれるな……。

幾分呼吸がマシになったところで、レインに支えてもらいながら立ち上がる。

「お姫様だっこ、してやろうか？」

「『……死ね』」

ニヤニヤと笑うレインに、シアンと声が重なった。聞こえているのは俺の声だけだけど。

「とりあえず……、町に戻っていいか？ お前らの聞きたいことも言える範囲でなら言うし、リースからは聞きたいこともある」

軽く溜め息を吐いた後に言うと、リースは少し肩をこわばらせて小さく頷いた。

自称リースの兄さんはそんなリースを見て何を思ったのかは知らないが「じゃ、夜の九時に酒場集合ということで」と、勝手に決めて、リースを抱えて俺たちの前から姿を消した。

……一瞬で。

「……何者なんだ、あいつ……」

俺の呟きは、さっきの俺の言葉に拗ねていたレインには届かなかった。

……

「死ねって……、酷い……」

「あー……、悪かったって……」

「本気で思ってるか？」

「うんうん、思ってる思ってる」

ちょっと鬱陶しいレインのご機嫌をとり、俺たちがその森を出たのは三十分後のことだった……。

無事に家へと戻ってきた俺たちは、二人用のダブルベッドへと腰掛けた。……と同時に、レインがまた俺に聞いてくる。

「本当に大丈夫なのか？」

これで何回目だろうか。心配してくれるのは嬉しいが、さすがに十回を超えると鬱陶しく感じる。

「大丈夫だつて。……これより酷いこと、あつただろ？」

半年前のあの日と、数ヶ月前の戦闘。……ほかにも多々あるが。吐血したり、体の全体が痛んだり、よく生きてたなと思うぐらい酷かった。

「でも、心配だ。……シアンが無理すればするほど、影響するのはお前なんだからな」

そう。

シアンが負った痛みや苦しみなんかは、全て俺にくる。

五感の半分以上が消えるのに、痛みは感じる。……逆に言うと、シアンは五感があつても、ほとんど何も感じない。

上手く説明は出来ないが、シアンが言うには、

『オレが持つのは人格と記憶だけだ。体はお前なんだから、人格のオレが痛みなんか感じるわけねえだろ』

だそうだ。……よくわからないが。

なら何で五感を感じるんだとか不公平だとか意味わかんないだとか、いろいろ不満をぶつけたこともあつたが、「んなもん知るか」で終わらされた。

それからというものの、俺は「仕方ない」で割り切って今までに何度も死にそうぐらいの大怪我を負ってきたというわけだ。

「はぁ……。ちょっと寝るから黙ってて」
面倒くさくなり、ベッドに寝転んで話を強制的に終わらせる。
レインがまだ何か言っていたが、疲れていた俺はその言葉を聞くこともなく眠りについた。

レイン視点

目の前ですやすやと眠るシオンの頭を撫で、小さく溜め息を吐く。
半年前は、こんな寝顔見せてくれなかったのにな……。

……半年前。俺が偶然たどり着いた一つの村、ミリク。
倒れていたシオンとその周りは血で染まり、建物も壊されていて、
一瞬魔物に襲われたのかと思ったぐらいだった。
急いで帰って手当てをして、初めは警戒していたシオンも、今では……。

……

はっとして時間を確かめると、もう八時三十分をまわっていた。
シオンを起こそうとシオンの肩に手をかける。

「シオン、そろそろ起きろ」

「れ……、れい、ん……？」

ガバツと起き上がって、俺の顔を見た途端、ほっと安心したような表情を見せた。

「どうした？ 怖い夢でも見たのか？」

冗談交じりに言っただがどうやら凶星みたいで、目が僅かに潤んでいる。

「……全部、忘れる夢」

ポツリと呟く。俺が言葉をかける前に、シオンが続けた。

「レインも、シアンも、自分も。……少ない記憶も全部忘れて、黒に飲み込まれた」

虚ろな瞳。何も言えなくなつて、俺はシオンを優しく抱きしめた。

シオンは、記憶を失っているらしい。半年前のあの日以前のことはほとんど覚えていないと、シオンが言っていた。

「……記憶、必ず見つけるんだろ？」

「ん……、ありがと」

シオン視点

レインの言葉は、いつだって俺を救ってくれる。……俺のほしい言葉を言ってくれる。

……ここ最近は特に、弱気になっていたと思う。

俺の生きる意味は、魔王を倒すことだけ。そう教えられて育ってきたのか、頭の中にはそのことばかりがある。

この町に来て半年なのに、なにも魔王の情報が見つからない。記憶だって、全然。

無理なんじゃないかと思ったこともある。魔王のこともだが、記憶のことも。

こんなに頭から離れないのだから、記憶を思い出せば魔王のこともなにかわかるんじゃないか……。そんな甘い考えで、記憶探しをする手伝いをレインに求めた。

……焦ってたんだと、自分でもわかる。

レインの言葉に嬉しくなった俺は、俺からもレインの背に腕を回して、少しだけ力をこめた。

レインが、俺の頭をまるであやすかの様に撫でてきた。
レインが、大丈夫だと囁いてくれた。

こんなレインだから、俺はレインに手伝いを求めたんだ。
……少しだけ、素直になってみようか。

「レイン……、ありがとう」

「んー？ どうしたんだ、急に」

少し驚いたのが、何となく気配でわかった。

「……レインだから、安心して求めれた」

「……………」

素直になるのは、少し恥ずかしい。僅かに頬が熱くなったのを感じる。

レインは何も言おうとせず、不思議に思った俺は少し体を離してレインの顔を伺い見た。

「も、も、も……」

「も？」

「求めるって言い方なんだよ！ あー、もう、お前可愛すぎ！」

ぎゅむっ。効果音をつけるならまさしくこんな感じに、俺はさつきよりも強く抱きしめられる。

「はあ……………」

どうしたものかと溜め息を吐くと、シアンの声が聞こえてきた。

『お前……、あの言い方はないんじゃないかねえか？』

「は？ どういう意味？」

『……いや、もういい』

二人してなんなんだと言おうと口を開きかけたとき、ふと時計に目を向ける。

「あ…………。レイン、もう九時十分前なんだが行かなくていいのか？」

「…………ああ！」

俺たちはその五分後に、慌しく家を出て酒場へと向かった。

.....

九時五分前。

俺達は息を乱しながらも、なんとか九時まで酒場に來ることができた。

「あ、いつら、は……っ？」

息を整えるために一旦大きく息を吐いた瞬間。

「あつ、こつちだよ！」

どこからか、あの男の声が聞こえてきた。

少し周りを見渡すとすぐに見つかり、カウンターから離れた、比較的人の少ないテーブル席に座っていた。

「待たせて悪いな」

近づきながらレインが言うと、男は「さっき来たところだよ」と、なんとも言えない綺麗な笑みを浮かべた。

「……あれか。王子様スマイルというやつか……」

あの笑みにぴったりの言葉を呟く。噂では聞いていたが、見るのは初めてだ。

『お前……、そんな言葉どこで覚えたんだあ？』

「シオン！ 一体そんな言葉、どこで覚えてきた！？」

二人が俺に言ったのは、ほぼ同時だった。

ただ、シアンは呆れたように。レインは、どこか焦ったような声色で。

「それじゃあ……、そろそろ本題に入ってもいいかな？」

しばらく俺達のやりとりを見ていた男が、遠慮がちに声を掛けてくる。

「あ、悪い……」

大人しく俺達も席に座る。本題という言葉にリリースが顔を上げた。

「森での……あの人は、シオンなの？」

いきなり直球で問われ、小さく溜め息を吐く。

レインが「話すのか？」と目で言っているのがわかり、どうしたものかと軽く首を傾げてみせた。

「……何で、聞きたいんだ？」

ただの興味本意なのか。それとも、何か理由があるのか。

俺が納得する理由が無ければ、わざわざ教える必要がない。

「気になるから……、だけじゃだめだよな」

苦笑を交えながら言うリリースに、俺はきっぱりと駄目だと告げる。

「私ね、この仕事を始めるときに、ある人から言われたことがあるの」

「ある人……？」

「私に、『素質がある』って言ってこの仕事について教えてくれた、私の先生」

懐かしそうに微笑みを浮かべるリリースは、その先生がよほど尊敬している大切な存在だと目で語っていた。

「『この仕事は、人の人生を左右する仕事だ。

魔物を討伐する人の中には、その魔物と出会うことによって人生が 運命が変わる特別な人がいる。

そんな人に出会ったときは、尋ねるんだ。そして、その人を死なせたくないなら、見極める。

……お前は必ず、特別な人に出会うよ。この言葉を覚えておくことだ、リリース』

そのときはまったく意味がわからなかったけど、今ならわかる。

……この仕事を勤める者として、シオンの知人として、私にあなたのことを教えて下さい。シオン」

目の前には、俺に頭を下げるリリース。

その表情から、本当に俺の身を案じているんだとわかった。……と同時に、そんなに危ない場所に俺達の追っている魔物がいるのか、とも思った。

「……少しだけ話す。そのかわり、魔物の位置を教えてくれ」

「ほんとっ！？ ありがとう、シオン！」

嬉しそうな表情をしていたが、声だけは心配そうな声色だった。

「……何が聞きたいんだ？」

「じゃあ……、さっきの……」

さっきということは、森でのあれは俺なのかということを知りたいのか。

「……あれは、俺であって俺じゃない」

こんな言い方でよかったのかとレインを見るが、レインは苦笑いを浮かべている。

「それじゃわからねえだろ」

レインの言葉に、じゃあどう言えばいいのかと目で訴えると、小声で「俺にまかせとけ」と返ってきた。

口下手な俺より、口が達者なレインに任せたほうがいいだろうと思ひ、おとなしくレインに任せることにする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0407p/>

もう一つの人格

2011年3月26日19時55分発行